

公益財団法人 松園尚己記念財団

My graduation 2021

氏名: 川谷維摩

北海道大学大学院 理学院 物性物理学専攻 博士後期課程

北海道大学大学院 理学院 物性物理学専攻卒

修士課程の2年間に様々な経験ができたと思っておりますが、実は私は環境の変化が苦手
で、本心を言えばできるだけ淡々と日々を過ごす方が好きです。一方で、学生という立場
は新しいことに挑戦するにはこれ以上ない環境であるということは進学前から認識して
いました。

そのような私が進学してから入った新しい環境の一つに「新渡戸カレッジ」という北大独
自のプログラムがあります。グローバル社会の中で専門性を生かして問題解決を進める力
を養うことを目指すもので、学部も国籍も違う様々なバックグラウンドを持った人同士で
チームを組んで課題に取り組みました。半期あるプログラム中は講義、ディスカッション、
プレゼンテーション共に全て英語で、その上課題は社会問題の本質を突くようなテーマで
与えられました。始まる前は割と自信はあったのですが、いざ始まると自分は良いアイデ
アを出すこともできず、下手な英語で話の腰を折るのを恐れて話の輪にも入れずで、グル
ープワークに全く貢献できませんでした。心も折れかけていたのですが、担当の先生から
「不快感を感じているのは良いことだ。その先に成長があるのだ。」と勇気づけられました。
この言葉は今でも心の支えになっています。そして、その後も続けていたらだんだんとコ
ツを掴めてきて、最終的にはチームでの議論やプレゼンテーションもこなせるようになり
ました。プログラム修了後は学部生向けのプログラムのTAとして参画し、後進の育成に
も携わることができました。この経験は自信に繋がる大変有意義なものでした。

もう一つ印象深い経験に、道内の学生がサハリンの大学を訪れて現地の学生と交流する
という事業への参加があります。北海道とサハリンは40kmほどしか離れていませんが、
サハリンに対して具体的なイメージを持つ日本人はごく少数だと思います。様々な理由か
ら、両地域間の交流は極めて少ない現状があります。私は以前からサハリンに興味を持っ
ており、訪問の機会をうかがっていた所でこの事業を見つけて参加を決めました。交流し
たのは現地の日本語専攻の学生でしたが、日本の文化に非常に興味を持っていたようで
した。中にはモスクワ出身で日本により近いところで学びたいと思いサハリンに移ったと
いう学生もいて感心しました。また、多くの学生は北海道への留学を検討しており、日本へ
の興味の高さを感じられました。我々もそのようなロシア人の姿を見て同国への興味はま
すます掻き立てられました。近年は電子ビザの整備が進むなどして日本人のロシア渡航が
比較的容易になりました。昨今のコロナウィルスの影響で海外渡航は難しい状況にはなり
ましたが、今後も北海道とサハリンの間での民間交流が継続されると信じています。私も

今後の両国間の交流については注視していこうと思っています。このようなことを考える機会をいただけたのも大変貴重な経験であったと思っています。

修士時代は研究にも注力しました。学部時代とは異なるテーマで研究することになったため、分野間の差異に戸惑うことも多くありましたし、実験がうまくいかず研究が停滞する事態もありました。様々な困難がありましたが、研究室メンバーの助言を受けながら一つ一つの問題に取り組み、学会発表や修士論文の完成につなげることができました。ただ、修士時代に論文投稿できなかったのが心残りです。実験を進めていくとサンプルの処理の問題や装置の故障など様々な原因で予定通りいかないことが多々あります。幸い、私は博士後期課程に進学して引き続き研究する機会を得ることができました。まだまだやり残したこと、明らかにしたいことが多く残っています。修士時代の経験を今後の仕事に生かして、研究成果を様々な形で社会に還元していきたいと考えています。

他にも学内外で様々な経験ができました。これは私の力だけで得られたものではなく、周囲の方々のサポートがあったからこそのものだと思います。今後もそのような方々への感謝の気持ちを持って学業に励みたいと考えています。